

特別企画展「石川町の中世世界」

と き：平成16年8月6日（金）～11月28日（日）

と ころ：石川町立歴史民俗資料館 3階展示場

主 催：石川町教育委員会

テーマ1：石川氏と中世

中世石川氏の概要

前九年の役で戦死した源頼遠の子有光は、康平6年（1063）、藤田城に住み、さらに三蘆城を築いて石川氏の支配が始まった、と伝えられておりますが、実際は後三年の役（1083年～1087年）の後と考えられることから、石川への土着は11世紀末以降であると言えます。

さて、12世紀中頃までに成立した石川庄の地頭となった石川氏は、鎌倉時代に各地に根をおろし、はじめは幕府の御家人、後に執権北条氏の御内人（北条氏の家臣）となって鎌倉幕府と深く結び付きました。南北朝の動乱では一族が対立し、ある者は南朝に、またある者は北朝に属しました。しかし優勢な白川結城氏の勢力が、しだいに庄内に浸透してくると、室町時代の正長元年（1428）、惣領の石川義光は白川氏朝に敗れ、文明16年（1484）の頃には、鎌倉時代以来の有力な石川一族であった赤坂・大寺・小高三氏が白川氏を名のり、また竹貫氏は磐城氏に属しました。

戦国時代になると、北進する常陸の佐竹氏に対抗するため、石川晴光は伊達氏から昭光を養子に迎えます。そして、田村氏や蘆名氏と戦い、戦国末期の伊達氏と佐竹氏の争いでは、天正13年（1585）の入取橋の戦（安達郡）の際に佐竹側につきましたが、天正17年6月の磨上原の戦（磐梯山麓）で佐竹方の蘆名氏が敗れ、ついで須賀川二階堂氏も滅亡すると、石川昭光は甥の伊達正宗に服属しました。

そして天正18年（1590）、小田原北条攻めの不参加を理由に、豊臣秀吉に領地を没収（奥羽仕置）された昭光は、政宗を頼って石川を去り、のちに子孫は、伊達一門筆頭として角田の地に移りました。



伊達政宗書状

伊達政宗自筆書状

（石川町指定有形文化財）

【白文】

追而屋薩被相越候、本望満足ニ候、然者、以書付承儀、先以無抛存候、条々存分口上ニ申渡候、殊近日可被打越之由、誠以祝着不浅候、残慶期後音候、恐々謹言

拾月晦日 政宗（花押）

石河殿

【読下し文】

追つて屋薩相越され候、本望満足に候、然れば、書付を以て承る儀、まず以て拠んどころなく存じ候、条々存分口上に申し渡し候、殊に近日打ち越されるの由、誠に以て祝着浅からず候、残慶後音を期し候、恐々謹言

【内容】

石川昭光の使者矢葺（やぶき）薩摩守（屋薩）が政宗のもとに赴いたのは満足である。その際の昭光の書状内容は止むを得ないものとして承諾する。「条々」については薩摩守に口上で申し渡した。昭光が近日面会のためお越しになることは大変満足である。

天正一七年（一五八九） 一〇月三二日

政宗（花押）

石河（昭光）殿

【解説】

天正一七年（一五八九）六月、政宗は蘆名義広（佐竹義重次男）を磐梯山麓磨上原に破つて会津の大半を手中にし、黒川（現鶴ヶ城）を居城とした。この結果七月には、佐竹氏に従っていた白川義親が佐竹氏を見限つて政宗に服属した。ついで一〇月、伯母である二階堂後室が守る須賀川城を攻落し、常陸佐竹氏の勢力を一掃した。

政宗の叔父である昭光も佐竹氏に従属していたが、密かに政宗に通じており、一一月四日、起請文を交換し政宗に服属した。この伊達政宗起請文は石川家伝来の文書（石川文書）であるが、現在宮城県図書館の所蔵である。本文中の「条々」は、白川氏の例によると服属条件を指すとみられる。年代は天正一七年に比定できよう。

本文書は昭光が政宗に服属するに当たつての両者の交渉過程に関わり、石川氏と石川町の歴史にとつて重要文書である。本文書は本来石川文書の一部であるが、石川家から流出した経緯と時期は不明である。

解説 小林清治福島大学名誉教授

吉田光一文書

（石川町指定有形文化財）

初代石川町長・吉田光一が所有していた文書で、中世期に石川庄の領主で石川氏の本城であった三蘆城に鎮座する、石都々古和気神社（旧称石川八幡）伝わる文書。「福島県史7 中世編」には9点あったとありますが、現在では伊達政宗書状1点が所在不明になっております。

石川持光条書 応永28年（1421）

道阿請文 永禄5年（1562）

岫雲寄進状 永禄11年（1568）

石川昭光証状 天正年間（1573 - 1591）

道阿道堅寄進状 天文22年（1452）

岩城親隆判物 永禄9年（1566）

石川昭光寄進状 天正年間（1573 - 1591）

石川昭光禰宜役安堵状 天正10年（1583）

石川大蔵院文書

(県指定重要文化財)

石川大蔵院は、元禄年間頃まで八大院と呼ばれ、中世以来、石川 66 郷、さらに竹貫郷の熊野参詣先達職と年行事職を、幕末まで続けた修験であります。この文書は、八大院の時代を経て大蔵院に伝わった文書です。ちなみに、石川町の旧町内字北町には屋敷跡が存在します。

2巻を収める文書箱の表には「東金峯古文書第三巻」とあり、蓋の裏には「文政十三年寅秋 聖護院盈仁法親王依御所望、被入御覧、修復書とて現住峯律師の需によりて禿筆を染畢、正四位下賀茂県主季鷹」と記されています。これより、文政 13 年(1830)に一連の文書が3巻に仕立てられたことがうかがわれます。

しかし残念ながら、現在は2巻が残るだけですので、応安3年(1370)の先達職安堵状、北条・今川・武田各氏の通行許可状、秀吉感状など6通を収める1巻が失われたものと推測されています。1巻はありませんが、八大院=大蔵院に伝来したこれらの文書は、中世石川荘および近世石川郡と竹貫の修験のありにとって非常に貴重な文書であります。

迎森一文書

(石川町指定有形文化財)

石川氏第24代の石川昭光が、天正17年(1589)、伊達政宗に帰属するようになりますが、領地であった石川から須賀川へ移されることとなります。

このために、本状にあるような給分の変動があったと思われます。つまり天正18年(1590)、石川昭光が石川の地を離れる年に書かれた文書であります。

石川宗家の家臣・迎家に伝わる文書です。なお、迎家宅裏には、松森館跡があります。

石都々古和気神社の鰐口

(県指定重要文化財)

石都々古和気神社は、はじめ農業の神が祭られていましたが、のちに石川有光が、氏神である八幡神をいっしょに祭りました。応永30年(1423)に奉納された銅製の鰐口は、県の指定重要文化財となっています。この鰐口には「奥州石川庄泉村館之八幡之鰐口也 応永卅年癸卯卯月五日大旦那源持光別当重慶敬白」の銘があることから、石川持光が寄進したものと分かります。

なお、鰐口の全面に金箔が貼られていたことが、現在でも表面から分かります。



石都々古和気神社の鰐口



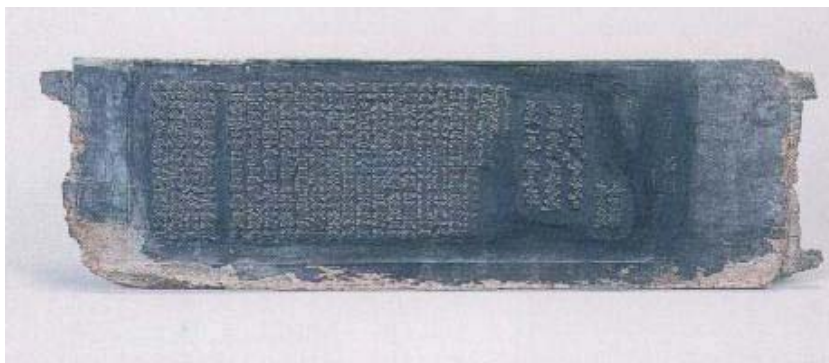
金箔が貼られています

薬王寺の版木

(県指定重要文化財)

版木とはお経や仏像を印刷する木版の台木ですが、徳一によって開山されたと伝えられている薬王寺(真言宗)に、鎌倉時代末から南北朝時代にかけての版木 81 枚が残されています。

内訳は、仁王般若経版木 11 枚(正慶元年(1332)の銘)、妙法蓮華経版木 70 枚(康暦 2 年(1380)の銘)となっています。これより、薬王寺が盛んに経文を印刷して布教活動をしていたことが分かります。



薬王寺の版木(仁王般若経)

テーマ 2 : 石川地方の中世城館

石川地方の中世城館

中世期の城は、天守閣や石垣を持つ、例えば若松城(鶴ヶ城)のような城ではなく、自然地形を利用した、山城や平城でした。当然ながら、現在では建物は残っておりませんが、平場、切岸、空堀、土塁といった、敵からの攻撃を防ぐための防御施設を現在でも見ることができます。

平安末期築城とされる三蘆城は、天正 18 年(1590)の豊臣秀吉の奥羽仕置まで、石川氏の居城となったところです。これを囲むかのように、石川氏の有力家臣の城館が位置しているのが、分布状況からよく分かります。本陣を守るために、城は意図的に配置されたと思われま

す。さて、この中世城館は、特に戦国時代、武士だけではなく一般民衆も城の近くに住み、有事の際には一緒に戦い、さらには民衆を守るための「避難所」としても機能していました。領民を守ってこそ領主であるという考えのもと築城された中世城館は、まさに戦国という世を生き抜くための、最後の拠り所であったでしょう。



三蘆城跡



沢古屋館跡

主な城館用語

- 居館（きょかん）・・・山城の場合、城主が平時に居住する山麓部の館。あるいは、平地部に単体として存在する防御施設を持つ館。
- 切岸（きりぎし）・・・曲輪を構築する際、斜面を急角度の壁状に削ったもの。
- 曲輪（くるわ）・・・堀、土塁、切岸などにより区画された一単位の平坦地。
- 虎口（こぐち）・・・城、曲輪の出入り口。
- 主郭（しゅかく）・・・城の中核をなす曲輪、曲輪群。
- 城館（じょうかん）・・・一般的に城（しろ）と館（やかた）を言う。しかし、地域によっては城そのものを館（たて）と呼んでいる。
- 豎堀（たてぼり）・・・斜面に縦に掘った堀（敵の斜面での横の移動を防ぐ）。
- 土塁（どるい）・・・土を掘ったり、尾根を削って構築した土手状の高まり。
- 縄張（なわばり）・・・築城プラン。占地、土木面の設計。
- 堀切（ほりきり）・・・尾根、台地などを掘って切断する堀。

テーマ3：中世期の暮らし

石川町古宿遺跡 24号土坑出土和鏡



2羽の雀と竹垣が描かれた鏡



松の枝を鶴が啜えた「松喰鶴鏡」

古宿遺跡は、石川町大字赤羽字古宿にあります。昭和62年から63年にかけて、母畑開発パイロット事業に伴って発掘調査が行われ、古墳時代から中世期にかけての遺構・遺物が多数発見されました。なかでも特筆すべきは、石川町では唯一の資料である和鏡2点が出土したのです。

これらは24号土坑内に小さい方が上、大きい方が下、という状態で重なって発見されました。大きい方（写真左）は、直径11.0cm、縁高0.6cm、重さ42gを測ります。2羽の鶴が紐（中央の突起）の上下に配置され、上が左向き、下が右向きの対称的に羽を広げる図柄です。2羽ともくちばしに松をくわえていることから、「松喰鶴鏡」と呼ばれる種類です。

小さい方（写真右）は、直径9.8cm、縁高0.5cm、重さ33gを測ります。内側には竹垣と草葉が描かれ

ています。さらに、紐の上方には2羽の雀が上下に見られます。外側には花卉状の文様が描かれています。
この2点の和鏡は、平安時代末期から鎌倉時代初頭のものと考えられ、平安京周辺の手工業品である和鏡の流通が、古宿の地まで及んでいたことを示す好例と言えます。

大小のカワラケ皿

カワラケは土師質土器とも言い、釉薬をかけずに焼いた素焼きの土器です。最近の研究では、日常的な食器というよりは、儀式などの場で、象徴的に使われていた道具だったと考えられるようになってきています。

沢田・新屋敷の殿内遺跡群からは、大小のカワラケの皿が出土しました。その特徴から、鎌倉時代後半につくられたもので、鎌倉幕府関連遺跡で出土した大小の皿のセットに非常に似かよっています。ただし、土器に使われた粘土の観察から地元産と思われるので、鎌倉幕府に関係する人物が地元の陶工に製作を依頼したものか、もしくは製作技法を学んだ人物が近辺に住んでいたのかもしれませんが。

いずれにしても、石川氏が鎌倉幕府の御家人、そして得宗家(北条氏)の御内人に上りつめていった様相が、この大小皿のカワラケのセットから浮かび上がってきます。



三芦城跡及び殿内 A 遺跡出土カワラケ

鹿角に付いた鉱物



出土直後に撮影した鹿角（殿内 A 遺跡）

殿内 A 遺跡 6 号溝状遺構から出土した鹿角は、出土当初は無色透明でしたが、時間が経つにつれて徐々に綺麗な青色へと変色していきました。これは藍鉄鉱(vivianite)という鉱物で、磷酸塩鉱物の一種であります。

土壌中に遺物が埋没すると、徐々に分解変質されますが、今回の遺物(獣骨)は発掘調査によって外気に触れたため、土中の物質と偶然反応し、急激な酸化作用を生じ青く変色したのです。

また、遺物の脱水作用により、表層部と内部に含有差が生じ、表面張力の働きも作用して遺物表層部に剥離を起こしています。

いずれにしても、非常に珍しい鉱物であります。(石川町文化財審議委員・橋本悦雄氏のご教示による)

温石

温石とは、現代風に言えば「カイロ」のことです。熱を加えると石がしばらく暖かいままである原理を生かした製品です。穴が1つあけられていて、これに紐を通し、首から下げて使われました。昔の修行僧が空腹を紛らわせるために、懷に暖めた小石を入れていたとありますが、これがそうです。ちなみに、懷石料理の「懷石」とは温石のことです。

温石のつくり方には二通りあります。1つは当初から製品としてつくりあげたものと、もう1つは石鍋の破損品を利用してつくりあげたものです。全国規模で商品流通しており、鎌倉などが拠点となっていました。

殿内A遺跡からは3点出土しています。1つは蛇紋岩製であることから、おそらく遺跡近くの沢井地区で産出したものを原料にし、当初から製品としてつくられたものでしょう。



温石（殿内A遺跡出土）

龍が刻まれた硯



龍が刻まれた硯（殿内A遺跡出土）

殿内A遺跡の溝が巡る掘立柱建物跡西側からは、龍が刻まれた硯が出土しました。これは中国産白磁、常滑甕、石臼など同一層位から見つかったので、これらと同時期に廃棄されたことが分かります。

粘板岩製のこの硯は、図柄に龍が見られます。顔の手前には円形の刻みがありますが、やや摩滅していて分かりにくいものの、手で玉を持っているようにも見えます。

多少赤みがかっているので、熱を受けていることが十分考えられるでしょう。

床下から出たお金の謎

殿内B遺跡1号住居跡の住居内ピットから、中国銭24枚がまとまって出土しています。

中国銭が出土した1号住居跡は、東西6.3m×南北4.0mの長方形で、貼床が2回行われています。大量の炭化物や焼土が出土していることから、火事にあつたと考えられます。中国銭が出土したピットは1回目の貼床面(以下第1期床面)から検出されました。直径0.7m、深さ0.2mの円形で、堆積していた土の中間から下層にかけて炭化物が出土しています。癒着した状態で出土したため、中央の穴に紐が通された状態にあつたことが分かります。この状況からは、お金をしまっておいた(備蓄銭)のようにも思われますが、そうではなさそうです。

第1期床面から検出されたピットは、2回目の貼床面(以下第2期床面)の下から検出されました。すなわち、第2期床面によ

開元通宝（621年 唐）	1枚
宋通元宝（960年 北宋）	1枚
咸平元宝（998年 北宋）	2枚
祥符元宝（1008年 北宋）	1枚
祥符通宝（1009年 北宋）	2枚
天聖元宝（1023年 北宋）	1枚
景祐元宝（1034年 北宋）	1枚
皇宋通宝（1039年 北宋）	4枚
景德元宝（1044年 北宋）	3枚
熙寧元宝（1068年 北宋）	1枚
元豊通宝（1078年 北宋）	4枚
元祐通宝（1086年 北宋）	2枚
政和通宝（1111年 北宋）	1枚

殿内B遺跡1号住居跡出土中国銭内訳

って蓋をされてしまっていたわけです。1回目と2回目の貼床の間に、どのくらいの時間差があったかは分かりませんが、銭をしまっておいたのをすっかり忘れ、床を貼ってしまったとは考えられません。

例えば、ピットからは銭とともに炭化物が出土しています。備蓄するための穴にわざわざ炭化物を入れるとは考えられませんので、第1期床面の時に火災に会い、新たな床を貼り直した時に、蓋をしてしまったのかもしれませんが。中世世界では、銭には呪術的な力があるとされていました。もしかしたら、地鎮といったマツリのために、後でお金を入れた可能性もあるのかもしれませんが。



床下から出土した渡来銭（殿内B遺跡出土）

禾目天目茶碗

天目茶碗とは、中国浙江省の天目山の寺院で使われていた黒い釉薬のかかった茶碗を、日本からの留学僧が持ち帰ったことから呼称されるようになったということです。抹茶を飲む椀で、抹茶茶碗の最高級品と言えます。本来は、中国で生産された天目茶碗の付加価値が一番高いのですが、そう簡単には手に入りませんので、比較的黒い釉薬（鉄釉）がつくりやすいことから、瀬戸地方でつくられるようになりました。

禾目とは、茶碗の表裏にかけ流された鉄釉の描く線が、米や麦の穂（禾）に見えることに由来します。ちなみに、中国では「ウサギの毛が流れるような」という表現をしているそうです。

茶 臼

茶臼の上下が、殿内A遺跡から多数出土しています。全て欠損品です。

茶臼の石材には、通常、花崗岩が選ばれています。殿内遺跡群の近くには、花崗岩の露頭があります。この露頭から採取した原料によって茶臼をつくったかまでは分かりませんが、板碑同様、花崗岩質の石製品が大量に出土していることは注目されます。



茶臼（殿内A遺跡出土）

陶 磁 器

日宋・日明貿易は、日本に銅銭をもたらしたと同時に陶磁器とその技術ももたらしました。

なかでも代表的なものが青磁と白磁です。青磁は龍泉窯、白磁・青白磁は景德鎮窯といった生産地を中心に輸入されました。殿内からも出土していますが、小さな破片でしか残っていませんでした。

国産の陶器も出土しています。常滑・備前・古瀬戸といった中世を代表する陶器です。常滑と備前は釉薬のかからない陶器です。どちらも大型の甕が多く、水などを貯蔵するために用いられました。古瀬戸は、中国から輸入された陶磁器を真似してつくられた、中世で唯一、釉薬のかかった陶器です。殿内遺跡群からは瓶子と呼ばれる、本来酒器として使用されたものや、平椀、そして禾目天目茶碗が出土しています。

テーマ4：中世の祈り

祈りの文物《板碑》



温石（殿内 A 遺跡出土）

建治元年（1275）の銘があるものです（写真上）。これを皮切りに、15世紀初頭までつくられ続けました。

石材は花崗岩を使用しており、関東地方に見られる秩父石（緑泥片岩）の青石塔婆といわれる板碑とはまた、趣が異なります。ただし、東北地方の板碑が自然石を利用した素朴なものであるのに対して、石川地方の板碑は、頭部が三角形につくられ額部が発達した北関東の板碑と同じ物がつくられました。

板碑とは、石でつくられた仏塔の一種です。板状の石に仏像や仏様を表す梵字（古代インド文字）を刻んだり墨で書いたりしたもので、死者の供養と自分自身の死後の供養を目的としてつくられました。埼玉県嘉禄3年（1227）銘が最古と言われており、南北朝・室町時代に盛んにつくられましたが、17世紀初頭には完全に姿を消しました。

石川町では、現在までに約300基が調査により確認されています。最も古い板碑は、野木沢・曲木地区にある

中世仏像の世界

木造地藏菩薩座像（光渡寺 板橋字沢古屋 南北朝時代）

仏高が52cmで、現状では両手の持物が後のものにかわったり失われたりしているが、左手に宝珠、右手に錫杖をとる通常のすがたの地藏菩薩とみられる。かや材で頭体幹部を通して前後に二材を矧ぎ合わせ、面部を割り矧ぎ、両眼には水晶製の玉眼をはめ込み、現実感のある表情をつくり出している。衣の襞はうねるように自在に彫出され、巧みな技術を示し、中央の仏師が当地にきて造立したものと考えられる。

（解説：福島県立博物館学芸課長 若林 繁）



光渡寺木造地藏菩薩座像



光国寺木造薬師如来立像

木造薬師如来立像（光国寺 曲木字仲ノ内 室町時代）

像高が29.1cmの小さな像である。現在、左手より先を失っているが、もと薬師堂の本尊であったところから、左手に薬壺をとる薬師如来と考えられる。両手首より先を矧ぐ以外は桂の一材より彫出され、両足下の台座の一部までも共に彫られている。素朴な技法で造形にもそれがうかがえ、目や口を顔の中央に寄せるおとなしい表情で、体軀の造形や衣の襞の彫出も変化に乏しい。

（解説：福島県立博物館学芸課長 若林 繁）



谷地千手観音立像

木造千手観音菩薩立像（千手観音堂 谷地字竹之花 鎌倉時代）

現状の像高が 104.3cm で頭上に結い上げた髻などを失っており、本来は 42 本あったと考えられる手も一部欠失している。

桂材で頭部は前後に二材を矧ぎ、首の下で体軀に差込み、体軀は四材を矧ぐ。両肩部にそれぞれ矧ぎ付ける。寄木造の本格的な技法でつくられており、造形も中央の正統を継いでいる。澄んだ表情の顔貌に伸びやかさのある体軀、衣の襞の彫出にも洗練さがうかがえる。

（解説：福島県立博物館学芸課長 若林 繁）

五輪塔の世界

巖峯寺石造五輪塔（国指定重要文化財 玉川村）

石川郡玉川村大字岩法寺には、石川氏の初期の菩提寺である巖峯寺跡が所在しますが、この寺跡の堂宇には、高さ 180cm を測る石造五輪塔がたたずんでいます。

この五輪塔の地輪には「施主 入道、治承五年辛亥十一月 日、為源基光」の刻銘があることから、源有光の子、基光の墓と分かります。

石造五輪塔で最古のものは、岩手県平泉中尊寺釈尊院の仁安 4 年(1169)、大分県臼杵市中尾の嘉応 2 年(1171)、そして巖峯寺五輪塔の治承 5 年(1181)となります。仏教文化中心の畿内地方に最古のものがなく、東北・九州という地に、なぜつくられたのかは、仏教文化史に大きな問題を投げかけています。



巖峯寺石造五輪塔

沢井・館五輪塔修復事業



沢井・館五輪塔(修復後)

沢井城北の麓、かつての寺跡とされる地に所在します。その来歴は分かりませんが、火輪以下の形態から、鎌倉時代後半から南北朝時代初期にかけての五輪塔と考えられています。

近年、この五輪塔の傾きが顕著となり、また、組み合わせ方が異なっている可能性が考えられることから、平成 15 年 10 月末に、石川町教育委員会が修復作業を行いました。その結果、火・水・地輪は同じものでありましたが、空・風輪は別の個体をはめ込んだことが分かりました。さらには、水輪は逆さまの状態で見え付けてあったことも判明しました。これより、かつて何らかの要因で倒壊したため、後世になって据え付け直したということが明らかになりました。これらを綺麗に清掃した後、本来の形態に復元した結果、巖峯寺五輪塔にも劣らない、素晴らしい中世の五輪塔の姿が現れました。

なお、五輪塔直下の発掘調査を行ったところ、骨や土器といった出土遺物はありませんでした。